

令和4年8月教育委員会定例会 議事録

開催日時	令和4年8月18日（木） 15時00分
開催場所	長崎県庁行政棟 教育委員会室
出席委員	中崎教育長、廣田委員、伊東委員、嶋崎委員
出席職員	島村政策監、狩野教育次長、竹之内県立学校改革推進室長、高稲教職員課長、加藤義務教育課長、田川高校教育課長、分藤特別支援教育課長、山崎生涯学習課長、谷口義務教育課人事管理監、初村高校教育課人事管理監、岩橋体育保健課体育指導監
開 会	<p>(中崎教育長)</p> <p>それでは、ただいまから8月定例会を開会いたします。</p> <p>なお、本日は黒田委員、森委員より、所用により欠席する旨、連絡をいただいておりますので、ご了承願います。</p> <p>それでは、本日の議事録署名委員を、私の方から指名させていただきます。議事録署名委員は伊東委員、嶋崎委員の両委員にお願いいたします。</p>
前回会議録承認	<p>次に、7月定例会の議事録は、各委員に送付されておりますが、承認してよろしいでしょうか。</p> <p>「異議なし」と呼ぶ者あり</p>
	<p>(中崎教育長)</p> <p>ご異議ないようですから、前回の議事録等は承認することにいたします。それでは、各委員、ご署名をよろしく願います。</p> <p>本日、提案されている議題等のうち、冊子2につきましては、教育委員会の会議の非公開に関する運用規定により非公開として協議を行いたいと思っておりますが、ご異議ございませんでしょうか。</p> <p>「異議なし」と呼ぶ者あり</p>
報 告（1）	<p>(中崎教育長)</p> <p>ご異議ないようですので、そのように進めさせていただきます。</p> <p>それでは、定例教育委員会冊子1について審議いたします。報告</p>

事項（１）について説明をお願いいたします。

（竹之内県立学校改革推進室長）

資料１ページ、報告事項（１）「令和５年度公立高等学校進学希望状況調査（第１回）の結果について」、ご説明いたします。

この結果につきましては、去る７月１９日に公表をさせていただいています。「１ 調査目的」は記載のとおりですが、本調査につきましては、７月１日と１１月１日の年２回実施することといたしております。「３ 調査対象者数」は昨年と比較し、８３人少ない１万１，９８５人となっております。「４ 調査結果」ですが、（１）進学希望者数は１万１，６８６人で、（２）進学希望率は９７．５％となっております。なお、未定者が全体の２．１％に当たる２５６人いますので、１１月の調査では進学希望率はもう少し上がるのではないかと考えております。（３）課程別進学希望倍率につきましては記載のとおりですけれども、全日制課程が０．９４倍で、昨年より０．０３ポイントの減となり、令和２年７月調査から３年連続して１倍を割る結果となっております。なお、全日制の志望者数は昨年と比較して、公立高校は２９４人減少となっておりますが、一方、私立高校は１２５人増加となっております。令和２年度から私立高校の授業料実質無償化の影響もあり、早い段階から、私立高校を第１希望とする生徒が増えている傾向にあります。また、多様な学び方を求めて公私立問わず通信制の学校を希望する生徒も増えつつあります。

２ページをご覧ください。希望倍率が高い学科、学校、普通科ごとに掲載しております。昨年の結果から順位の入れ替わりはあるものの、例年と同様、工業高校の機械科や情報技術科、建築科、商業高校の情報科など希望倍率が高い状況となっております。

３ページをご覧ください。新たな学科を設置した６校のデータとなります。令和４年度に開設した松浦高校の地域科学科、令和５年度に開設予定の長崎北陽台、佐世保南、島原、大村、猶興館高校の文理探究科については、いずれも希望者数が定員に達していない結果となりました。松浦高校の地域科学科につきましては、今年度新しい普通科の形として、地域科学科を設置いたしまして、昨年度から進学にも対応できる学科であることを説明会やメディア等を通してアピールしてきましたけれども、以前から佐世保市や隣接する伊万里市へも進学する生徒も一定数いて、希望者の増加には、まだつながない状況となっております。今年度から地域科学科のさらなる学びの充実を図るために、国の新たな委託事業を受けまして、

その事業の中で松浦市内の元中学校の校長先生にコーディネーターとなっただき、地域と学校をつなぐ役割を担っていただいております。このコーディネーターが中学校に対して生徒募集活動や情報交換を積極的に行っていただいておりますので、これまで以上に周知広報を強化していけるものと考えております。

文理探究科に関しましては、学科の特徴でございます探究的な学びの重要性につきまして、受検生にまだ浸透できていないことや、普通科と比較し募集定員が少ないことなどから、敬遠されたものというふうに分析しております。昨日、文理探究科を設置する予定の5校の校長先生に来ていただきまして、生徒募集に関して現状の分析、それから今後の広報活動について意見交換を行いました。既にオープンスクール等を開催した学校ではある程度、文理探究科の魅力や普通科との併願ができることなどについて、周知を図られている報告を受けております。地区別説明会や、オープンスクールが終了している学校もございまして、今後の広報活動としましては、近隣中学校や学習塾への個別訪問等を強化することで、さらなる周知を図りたいということなどを確認いたしました。

また、県教委の広報活動としましては、これまでも新聞、テレビ等、特集で取り上げていただいたり、教育委員会の広報誌による周知、または県内のコンビニエンスストアへのパンフレット設置などを行ってまいりましたけども、今後も県の情報番組、それからラジオ、全世帯広報誌などの媒体を活用しまして周知を図り、文理探究科の希望者の増につなげていきたいというふうに考えております。

今回の結果は7月1日を基準日としておりますけども、各学校で中学校によりましては5月、6月に調査されたところもあり、中学校の3者面談や高校のオープンスクール、学校説明会等のものが反映されていないものとなっております。ただ第1回の希望調査というところで、全日制課程で3年連続して希望者が定員に達していないといったような状況につきましては、厳しい状況であると認識しております。そのため7月25日に開催された校長会において、県立高校が選ばれなくなっている内的要因を各校とも分析していただき、生徒募集戦略の抜本的な見直しをお願いしたところであります。11月に実施する第2回の調査、またはその後の出願に向けまして、学校と一緒に広報活動に取り組み、希望者の増を図ってまいりたいというふうに考えております。以上で説明を終わります。

(中崎教育長)

<p>質 疑</p>	<p>ただいまの報告に対しまして、ご質問、ご意見等ございませんでしょうか。</p> <p>(廣田委員)</p> <p>私は、この3ページ目の文理探究科、多分、去年の設置のときも申し上げたと思うのだけでも、この文理探究科を設置するのはいいのだけど、要するにこれは、今まで普通科の改編の中で文系と理系に分かれて、例えば文系であれば理系の科目を学習しないとか、そういう弊害をなくして、文系と理系との融合みたいな形で設置をする。国の方針もそういう方向に向いているので、いいとは思いますが、僕はそれを提案されたときに、何でそれを5校とも文理探究科という名前にしてしまうのかというのを、ちょっと異議みたいなことを申し上げたと思うのですよね。はっきり言うと、予想どおりにこういう倍率になってしまったということに、ちょっとがっかりしているのですよね。せっかく作った設置した学科だから、やっぱりそこに倍率が1倍を超えて、例えば1.2倍でもいいし、そういうふうになった方がいいのではないかなと思うのだけど、例えば文理探究科という名前自体が、学校から出てきたものか、教育委員会が提案したものか。何かその辺のところ、こういう新学科を設置するところの非常に大きなインパクトがない部分になってくるのではないかと。学校の先生方も忙しくて、新しい学科の名前を考えるというのはなかなか、どういう学科がいいのかというのも、考えつかない部分もあるのではないかと思うのですよね。そうするとやっぱり教育委員会の中で、そういう新しい学科のネーミングというのも考えていかないといけないけど、どうして5つとも全部、文理探究科になってしまうのか。</p> <p>この前、送られてきた内外教育読んだら、もう全国に行けば、いろんな特色ある学科を設置していますよね。熊本県なんてマンガ科なんてね。やっぱりどうせ新しい学科を設置するならば、そういう子どもたちが飛びつくような学科の設置を考えたらどうなのかなと思うけど、まずその文理探究科というのは県教委が提案したものなのか、学校から上がってきたものなのか、それをもう1回ちょっと確認したいのですが。</p> <p>(竹之内県立学校改革推進室長)</p> <p>今のご質問の件でございますが、まず探究という名称でございますけれども、これは私たちが調べる中で、大体、全国で30校ぐらい実はもう〇〇探究科、またはそのまま探究科という名称で、専門学</p>
------------	--

科となって、いわゆるこのような取り組みをしている学科の設置といったものが、全国的な広がりがございます。京都の堀川高校がきっかけでございますけども、平成20年ぐらいから、全国的にもじわじわ広がる中で、新しい学習指導要領にも探究的な学びの重要性といったようなものが盛り込まれたこともあり、本県だけではなく複数の県で、この探究という名前のつく学科の設置といったようなものが進んでいる、いわゆる時代的な流れの背景といったようなものが1つございました。

もう1つは教育委員会からの提案かというところでございますけれども、ここはもう教育委員会からの案としまして、各学校の校長先生方の意見もいただきながら進めてまいりました。そしてその中でやはり今後、今の教育界の流れの中で文理分断の脱却、こういったものをやはり打ち出す必要があるのではないかと。それで今、募集に苦しんでいる理数科を設置している4校の校長先生方のお考えもありましたものですから、そういったものを総合的に判断して文理探究科といったような名称にした背景がございます。

今、廣田委員さんの方からご指摘があったとおり、5校に同じ名称で設置するといったようなものの特徴というものを打ち出しにくいのではないかとというご指摘がございました。確かにそういう面もあるというふうに考えておりますが、やはりこの文理探究科を設置するところで、それぞれの今地域の中で大学進学を希望している生徒を引き受けている、進路実現を担ってきた拠点校といったような意味合いがこの5校にはあるかというふうに思っております。そういった中で、各学校がこの文理探究科のつながりを持ちながら、教員研修も一緒にやっていきながら、探究的な学びを深めていく。そしてそれぞれの学校が、またそれぞれの実情に応じた特色ある教育プログラムを構築することで、特色を打ち出していきながら、今後、中学生や保護者に対してPRを重ねていき、志願者増につなげていきたいというふうに考えているところでございます。

(廣田委員)

わかるのですが、やっぱり5校同時に文理探究科を一緒に提案するのは僕はどうかなと、今でも思っていますので。ですからやっぱり特色を出して生徒を引きつける以上は、同じ文理探究科であっても名称ぐらい変えろとかね、やっぱりそうした方がいいのではないかな。例えば前回申し上げたと思うのだけど、教育委員会の会議があったときに提案された、高校の段階から大学と連携して教員養成の道を進むとかね、例えば島原とか長崎北陽台は、学校の先生

になる率が非常に高い学校ではなかったかと思うのですよ。そういう学校は、例えば学校から提案して、そういう学科を設置しますと。教育委員会がよく話してアドバイスをしていた方がいいのではないかなと思うのですけどね、その辺はどうですか。

(竹之内県立学校改革推進室長)

今、まさに普通科改革の中で、全国の学校の中で、いわゆる医学部、メディカルのコースを目指すような生徒を、そういったものを目指す学科ですとか、また今、ご提案あったような教員を目指すような子どもたちが、大学にきちんとつながるような、そういう学びも打ち出すような学科のあり方とか、そういったようなものが進んでいるかと思えます。今後はやはりそういった生徒のニーズですとか、またはその進路希望ですとか、そういったようなものが大学の学びにつながるような、学科のあり方というのを、普通科の中で検討していくというのは非常に重要になってくるというふうに思っております。ただ、今度の文理探究科につきましては、この名称はこういうふうに5つの学校同じになりますけれども、中身の学びの部分につきましては、それぞれの学校で今、ご提案があったようなコース制を改めて設けるですとか、また2年生から分かれる部分の理数や国際の学びの部分に反映させていくとか、そういったところで特徴を出していくような、そういったようなところにまずやっていきたいというふうに思っております。その他の学校の普通科の学びの、新たな学科のあり方とか、学びのあり方につきましては、今のご提案も踏まえまして今後、ご提案していきたいというふうに思っております。

(廣田委員)

とにかく、設置した以上は生徒たちや保護者にはっきりその学科の内容が見えることが必要なので、こういう倍率というのは見えてないということだろうと思うのですよ。ですから、ただオープンスクールを開いて説明をするというだけではなくて、やっぱり学校の特化した担当者が各中学校を回ってこういう学科ですと。1年生、2年生ではこう、3年生では例えば留学もありますとかね。そういうことを説明してもらおうような方策をとらないと、結果的にはまた、前の理数科と同じようにそこで留まってしまって、何の改革にもならないということになるから。この辺を少しきつく学校には言った方がいいのではないのでしょうかね。私立学校はもっと努力していると思いますよ。

(中崎教育長)

ありがとうございました。ほか、ございませんでしょうか。

(嶋崎委員)

文理探究科のお話ですけど、廣田先生がおっしゃるように、なかなか内容が訴求できてないのが現状で、まだこれからなのでしょうけれどもね。やっぱり大学に進学する、いい大学に進学するというのは、子どもたちの大きな目標であり目的だと思うので、そうなるカリキュラムがどうなっているのか、あるいはそれぞれの科目別の時間数がどうなっているのかというのは知りたいですよ。父兄もそうだと思うし、他にいいこと書いてありますよね。海外の研修とか。いいことだと思うのだけれど、じゃあどういう時期にどれぐらいの期間で、費用は幾らかかるのかというようなことを、もっと具体的にお知らせしないと、なかなか今の段階では多分わかりづらいのじゃないかな。まあ11月1日の調査のときには、恐らく充実してくるのかもしれませんが、そういう努力を重ねてください。

(竹之内県立学校改革推進室長)

ご提案ありがとうございます。来年度から導入でございますけども、教育課程の方も確定いたしましたので、その点はもうわかりやすく中学生の方にお伝えしなければならないと思っています。今後、中学校を回ってそういった周知を図りたいというところ。それからまさに海外の修学旅行、海外研修旅行に行くためには、それ分の費用がかかりますので、そういったような費用についてもお知らせしながら、理解を得ながら実施していただかないと、入学してからこんなにかかるのかといったようなことでは困りますので、そのあたりについても、しっかりと周知を図っていきたいと思っております。

(嶋崎委員)

進学希望率の高い学科の中で工業高校とか商業高校の情報関係の学科ですね、やっぱり倍率高いんですね。だけど定員も少ないんですね。このところ新聞を見ていますと、特集でシリコンアイランド九州ということで、熊本のある企業とか話題になっていますけれども、1,700名の雇用が必要になってくるし、長崎の企業も、今、必死でそれこそ青田買いをしているようですし、今後、情報系はやはり社会的にニーズが高いと思うんですね。ですから定員であったりとか、また授業の内容、あるいは指導者の充実を図るというよう

な、県としての大きな方針を目指すべきじゃないかと。長崎にも情報系の企業があるわけですからと感じています。

(竹之内県立学校改革推進室長)

まさにおっしゃるとおりでございまして、地域、それから地元のニーズにあった、まずは人気のある、そういったような学科の充実にも力を入れていきたいと思っております。特に今おっしゃった情報系の人気というのは工業高校、それから商業高校ともに高くございます。やはりこの指導者の確保、そういったところも、非常に大切になってまいりますので、そういったところにも力を入れながら充実を図っていきたいというふうに思っております。

(伊東委員)

今の若い人というのは、冒険を好むというか、留学したいとかという人ももちろんいるかと思うのですが、比較的あまり飛び出さずに割と無難に生きていきたいというような学生が多いような気がしています。そういう中で、この文理探究科という名称は、少し尖っている感じがするのですね。それよりは普通科に行って、いろんなことをまず万遍なく勉強して、そして大学に行く前に、自分の進む方向を決めるというのが無難と言ったらすごく申し訳ないのですが。最初に廣田先生もおっしゃっていた文理探究科という名称が、やはりちょっと入って行きづらいという気がして、例えば私が受検するとき、今までも出たお話ですけど、この中身が本当に理解できていないと、そこに進学したいという気が起きないのかなという気はいたしておりました。

あと1つ、教えていただきたいのですが、通信制課程がありますよね。非常に倍率が低くて、600人分定員がある中で、通信制課程を長崎県として維持していく必要があるのか、こういうのは各県にそういう学校があるよりは、もう大学で放送大学みたいなのがあって、全国にそういう通信制のシステムをつくっていくわけにはいけないのかとちょっと思いました。経費がどうかという気がしているのですが。

(竹之内県立学校改革推進室長)

まず文理探究科の難しさ、普通科の方がまだいいのではないかと、得体の知れない学科、よくわからない、行きづらいといったような、まさにその部分は乗り越えなければいけないところだろうと思っております。ご指摘を踏まえまして、文理探究科のわかりやすい説



明、それから普通科との共通点や違い、そういったこともお伝えしながら進めていきたいと思えます。

それから通信制でございますが、今の段階では、まだ希望者数、非常に少ないのですが、ここからどんどん増えていくような状況です。実際には、定時制も同じなのですけども、基本的にはセーフティーネット的な意味合いもございまして、なかなか全日制に行くことが難しい、朝なかなか起きることができない子どもたちですとか、またはもう少し緩やかな中で高等学校の授業を受けたいといった子どもたちのニーズも一定ございまして、長崎県では鳴滝高校と佐世保中央高校、2校に通信制を設けて、さまざまな事情を抱える子どもたち、生徒たちも引き受けているという実情がございまして。一方で広域通信制の私立の学校を希望する生徒さん、例えば有名なところでN高校ですとか、そういったところもまた別のニーズになってまいりまして、公立で引き受けている通信制の学校の生徒さんというのは、そのようにさまざまな事情を抱えた子どもたち、生徒さんたちといったようなものを引き受けているといったような実情がございまして。定員は600というようになっておりますけども、もちろん全部が埋まることはございまして、その大きな構えをしながら受け入れている、引き受けているといったようなのが実情でございまして。在籍する生徒さんで、実際に卒業できる生徒さんというのは、全日制に比べ割合で少ないといった実情がございまして。

(伊東委員)

私立の通信の高校との差別化というのは、そういう学生さんが行けるような受け皿になっているということですか。実際の科目とか、そういうものにも違いがあるのでしょうか。

(竹之内県立学校改革推進室長)

特別なプログラムを、いわゆる私立の広域通信制の方で準備しているところもあるかと思うのですけれど、基本的な必修科目というのは全く同じでございまして。その必修科目に加えて、どの科目をどう設置していくのかということで、特徴が出てきますけれども、基本的には同じ科目というところになります。

(中崎教育長)

ほかにご質問ございませぬでしょうか。

いろいろ、ご指摘ありがとうございました。もう今、その人口減少というか少子化の流れの中で、公立高校というのはご説明したよ

うに非常に定員割れという状況にある中で、我々、教育委員会としても学びの中にですね、やはり今の時代にあったメッセージを出していかないといけないと思っています。ご質問があったように、2つあって、そのうちの1つがやっぱり地域で探究的な学びによる人材育成。今どちらかという、長崎、佐世保、諫早を中心とした大規模校に私学も含めて、子どもたちは地域から流れて行っているのですけど、そこから外に出て行っている。そんなことを考えると、やっぱり地域でしっかり探究的な学びをやって、高校までは育った地域でやって、それでふるさと教育も含めてしっかり長崎県のことを考える人材を育てていきたいと思っています。そういう意味では今回の文理探究科というのは、地域での探究的な学びの1つの象徴的なものだと思っていますので、しっかりやっていきたいと思っていますのですけども、今ご指摘のとおり認知度不足等もございますので、先般、校長先生とも集まりながら、どう保護者の方に理解してもらえるか、あるいはなぜ地域でこういう探究的な学びを我々がやろうとしているかということ、しっかりメッセージとして出していこうと思っています。少し時間は限られていますけども、しっかり11月のときには定員割れしないような方向を出していきたいと思っています。

それからもう1つは、嶋崎委員からもご指摘があったように、地域のニーズにあった産業人材の育成も大事だと思っています。なかなか実業系の高校が、実際、地域が求める産業ニーズと合ったカリキュラムにちょっとなっていないような状況もございますので、先ほど話にあった情報系も含めてですね、もう少しそういったところとマッチングさせることで県内就職の方も可能性が出てくると思っています。そうすると今度はそういった情報を知る外部人材をどういうふうにして確保するか、そのような課題とあわせながら、子どもたちはどんどん外に出て行っていますけども、公立高校の役目の1つとしてですね、長崎県のことを考える子どもたちを育てるというようなことは大事だと思っていますので、ご指摘を踏まえながらの高校改革についても取り組んでいきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

(嶋崎委員)

これも今朝の新聞だったと思いますけど、灘高の取り組みが出ていて、学校の優秀な立派な先輩方がいらっしやって、その人たちの講演を学校の方で頻繁にやっているという取り組み事例が掲載されていたと思うのです。学校の周年事業で、今回は誰を呼ぼうかじ

やなくて、頻繁にそういうことを各学校、地域で取り組んだらどうかと思うのですね。それは講演だけではなくて、例えば、パネルディスカッションであったりとか、やはり生のそういう実業で成功された方のお話を聞くって大切なことだと思うのですよね。それはもう決して文理探究科とか、普通科とか隔てなく、それでモチベーションが上がったりするのではないかと思いますので、何か検討したらいかがかなと思っています。

(中崎教育長)

そういったことも含めながら、学びの中に入れていくような努力もしていきたいと思います。ありがとうございます。それでは続きまして、報告事項(2)につきまして、お願いします。

(田川高校教育課長)

冊子1、9ページの報告事項(2)になります。「第17回若年者ものづくり競技大会における高校生の活躍について」、ご報告をいたします。

このたび、表彰を受けた生徒の所属校は長崎工業高校と大村工業高校になります。この大会は、工業高校を初め、職業能力大学校等において、20歳以下の若年者を対象に開催される大会でございまして、出場条件としましては、高校生ものづくりコンテスト九州大会で、前年度の優勝校または各県の職業能力開発協会の推薦を受けている学校であることが条件となります。競技結果は、そこに記載しておりますように、機械製図(CAD)部門におきまして、長崎工業高校機械科3年 乙成拓海君が2年連続の金賞、そして大村工業高校機械科3年 橋本健多郎君が銀賞を受賞しました。また電子回路組立て部門で長崎工業高校情報技術科3年 坂本寛弥君が金賞、木材加工部門で長崎工業高校インテリア科2年 原 莉琉さんが銀賞を受賞しました。さらにウェブデザイン部門で長崎工業インテリア科2年 杉下 悠君が銀賞、同じくインテリア科2年 森野菜々実さんが敢闘賞を、さらに旋盤部門で長崎工業機械科2年 山口颯君が銅賞を受賞しました。今回、7名が本県から出場をいたしました。その7名全員が賞をいただくことができました。

次の10ページをお開きください。過去の競技大会の結果を掲載しております。一番下が第1回大会で、第6回までは受賞者1名でございましたが、その後、次第に増えていきまして、今年度の7名は、昨年度に並び過去最高となっております。なお関連になりますけれども、7月に行われました高校生ものづくりコンテスト九州大

<p>質 疑</p>	<p>会におきまして、8部門中7部門で本県の高校生が最優秀賞を受賞し、11月の全国大会に出場します。</p> <p>また農業関係ですけれども、今年9日と10日に熊本県で実施されました農業クラブ九州大会におきましては、6部門中3部門で最優秀賞を受賞し、10月の全国大会に出場いたします。</p> <p>(中崎教育長)</p> <p>ただいまの報告に対してご質問、ご意見等ございませんでしょうか。</p> <p>(廣田委員)</p> <p>大変すばらしい結果で、本当に長崎工業と大村工業の努力には頭が下がるのですが、県内にはいっぱい工業高校ありますよね、佐世保工業とか。そういう工業高校は出場しなかったのか。まずそれが知りたいですね。</p> <p>(田川高校教育課長)</p> <p>今、廣田委員の方からご指摘いただきましたように、本県工業高校は5校ございまして、それに加えまして上五島高校には電気情報科を有しております。今回は長崎工業と大村工業の生徒が受賞するという形になりましたが、この全国若年者ものづくり競技大会は出場資格がございまして、全国の協会の推薦が必要であったり、あるいは前年度九州のものづくりコンテストで最優秀賞を獲得した学校ですとか、そういった条件に該当する学校が本年度出場校としては長崎工業と大村工業であったということになります。昨年度は島原工業が出場しておりまして、フリス盤の職種で金賞を受賞しております。そういう状況でございます。</p> <p>(廣田委員)</p> <p>それ聞いて、ちょっと安心はしたのですが、佐世保工業も非常に大きい学校で優秀な生徒が多分集まっていると思うのですよね。そういう学校が1人もいないというのが、ちょっと物足りないなという感じがしたものですから。そうすると、例えば10ページにある令和3年度は島原工業って聞きましたけど、これはやっぱりこの中には佐世保工業の名前も入っているのですね。元年度からずっと書いてありますけど。</p> <p>(田川高校教育課長)</p>
------------	--

この中には佐世保工業が受賞したものも含まれますし、また先ほど申し上げました九州のものづくりコンテストの中では最優秀賞はもらっておりませんが、九州の上位に入っている工業高校も本県の中にはございますので、ご安心いただければと思っております。

(廣田委員)

工業高校は非常に優秀な生徒たちが集まってくると思うのですよね。ただ僕がちょっと残念に思っているのは、工業高校から大学へ行くという生徒が長崎県はちょっと少ないような感じがするのですよね。例えば長崎大学に進んでくれば、地元にも残りますし、ある意味もっと高い資格が取得でき、待遇も大学卒業生であればよくなるので、こういう生徒たちは大学に行ったらもっと伸びると思うので、そういう大学進学という面もやっていただきたいというのが1つですね。これは要望です。

もう1つ、ウェブデザインというのがありますね、この中に。恐らくパソコンを使って、デザインかなんかをやっていくのだろうと思うのですが、こういうのが例えばある意味、ものづくりとはまたちょっと違うのでしょうか、例えば普通科にもこういうウェブデザインみたいなのがあればね、行けるのではないかなと思ったものですから。ウェブデザインって大体どういうことをやる部門なのか、ちょっと教えてください。

(田川高校教育課長)

今ウェブデザインのご質問いただきましたけども、まずこの競技におけるウェブデザインの中身についてご説明をさせていただきますと、2日間に分けて5時間の競技ということになります。ウェブデザインということですので、基本的にはホームページを設計するような競技になります。今年度はその競技課題といいますのが、具体的に設定としまして、広島県で観光業を営んでいる中小企業の、仮の名称なのですが、もみじツーリストという設定で、アフターコロナに向けて観光需要を見据え、ウェブサイトをリニューアルするという課題でありました。おもしろいのは、課題が事前に通知されるんですけども、当日10%程度、この後、変えられて提示されるという、そういう内容でございまして、コンテンツをもとに観光コースがいろいろあって、そして写真も並べてあって、それをどういうふうにもっとうまくコンセプトにあったホームページを構築していくかというのを競技するというような、そういう競技内容でございました。

(廣田委員)

今、聞いた内容なら、さっきの私の話が文理探究科にぴったりの内容じゃないかなと思ったものですから。文理探究科がそういう部門もやりますとなればもっと生徒が集まるのではないかと。これだけ工業高校の志願者が多いわけですからね、そういう感じがしました。いかがですか。

(田川高校教育課長)

ありがとうございます。普通科の教育カリキュラム、それから専門学科の教育カリキュラム、そのできるところの精査が必要かと思うのですが、そういったようなウェブに、デザインにできるような、そういったような教育課程についてもですね、普通科の中でまたいわゆる理数、国際に関する学科の中で、どれぐらいできるかというのを精査しまして、専門教科として導入できるかどうかを検討したいと思います。

(中崎教育長)

ぜひ、いろんな可能性を探ってみてください。ほかにございませんでしょうか。

(伊東委員)

今、ウェブデザインのお話聞いて、工業高校の中にどれぐらいの女子学生がいるのかちょっとわからないのですが、長崎大学を見ても割と女性がいる領域って限られています。機械とか電気とか、その辺にはもうほとんど女性がいない。建築とか例えばまちのデザインをすとかですね、そういうところに女性の教員がいたりするのは、何かこれを見ながらやっぱり女性に向いている工業高校での領域ってこういうところかなとちょっと思ったところがありました。もう少し、いろんなところで、機械の中でも女性が活躍できるようなというか、そういうものができて、そこに新しい女性のいろんなアイデアとかが入っていったら、もっと広がっていくと思っていたところです。

(田川高校教育課長)

最近、もう従前からですが、リケジョという言葉もごさいますし、またその後には土木女子はドボジョというような形で、工業部門の中にも女性が入ってくるような形で、ジェンダーフリー

も随分、進んできているように思っております。我々、学校訪問に行きまして授業を見ておりますけれども、そしたら例えば機械科ですとか、従前であればもう男子がほとんどというところにも、女子生徒が混じって授業を受けておりますし、また先ほど建築という学科の名称も出てまいりましたけども、インテリア科を有している学校もございます。そういったところでは、女子生徒の割合が比較的高いようなところもありまして、以前に比べると、工業高校の中にも女性が活躍する、女性が入学してくる、そういう割合も高くなってございますし、今後もまた一層高まっていくのではなかろうかなというふうに思いますし、またそういう広報も進めていきたいと思っております。

(中崎教育長)

ぜひ、女性活躍の視点は大事なので、パンフレットの中にもそういった女性向けのメッセージを出すとかね、ぜひ工夫してください。ほかにございませんでしょうか。

----- な し -----

報 告 ( 3 )

それでは、続きまして報告事項(3)についてお願いいたします。

(分藤特別支援教育課長)

資料1 1 ページ、報告事項(3)「鶴南特別支援学校時津分校の本校化について」、ご説明いたします。

本校化の経緯につきまして、「1. 鶴南特別支援学校時津分校の状況」をご覧ください。時津分校は知的障害のある児童生徒のための学校として設置をされました。長崎市蚊焼にございます、鶴南特別支援学校本校に属する分校でございます。小学部が平成18年度、中学部が平成24年度、高等部が平成27年度にそれぞれ設置をされて、主に長崎市北西部、長与町、時津町等の子どもたちが通学をしております。長崎市中心部に隣接する地域で、住宅地開発などによる子育て世代も増えている状況などから、児童生徒数の増加にあわせて段階的にこれまで分教室を分校化、そして現在、県内の本校13校の学校規模と比較しても4番目に相当する大きな規模となっておりますので、令和6年度に本校化を行うことにつきましては、第2期の特別支援教育基本計画、第1次実施計画に基づき対応することとして、令和4年2月に県民の皆様に公表し、準備を進めているところでございます。

<p>質 疑</p>	<p>本校化を行うメリットとしましては、校舎増築による教室不足の解消のほか、分校には校長、事務長が配置されておりませんので、新たな配置により学校のリーダーシップやマネジメント機能、事務体制の強化が図られることから、校長がリーダーシップを発揮して複雑化、多様化した課題を抱える特別支援学校を変えて、学校の教育意欲をさらに高めてくれるものと期待するところでございます。</p> <p>関連して、現在、長崎市蚊焼の本校である鶴南特別支援学校の校長が時津分校を含む2分校1分教室を含めた管理運営の責任者となっていますが、時津分校の本校化に伴う校長配置により管理が移管されて業務の大幅な負担軽減につながるものと考えております。</p> <p>「2. 今後の予定」をご覧ください。9月に校名を公募した後、10月に校名を選考し、11月の教育委員会において、下の方に丸数字を示しておりますが、①新特別支援学校の設置、②鶴南特別支援学校時津分校の廃止、③鶴南特別支援学校西彼杵分教室を鶴南特別支援学校の分教室から新校の分教室に変更することの3点について、お諮りする予定としております。なお、施行日はいずれも令和6年4月1日を考えております。</p> <p>「3. 内容」をご覧ください。先ほど「2. 今後の予定」で説明しましたとおり、学校名の募集を9月1日から開始いたします。12ページに校名公募のチラシ、13ページに募集要項の案を参考として添付しております。時津分校の子どもたちや先生方にもチラシ作成や応募箱の作成に協力してもらうなど、みんなで本校化に向けた機運を高めながら準備を進めているところでございます。引き続き鶴南特別支援学校時津分校の本校化に向けて、地域、学校、関係課と連携しながら着実に取り組みを進めてまいります。説明は以上であります。</p> <p>(中崎教育長)</p> <p>では、ただいまの報告に対しましてご質問、ご意見等ございませんでしょうか。</p> <p>(廣田委員)</p> <p>この校名募集は大変いいことだと思うのですよね。なんかポスターも可愛らしくて、なんかいっぱい応募がありそうな感じもしますが、こういう新しい学校をつくる場合は、多分、こういう形で一般から募集をかけてきたのだと思うのです。鶴南という名前も多分そうやって生まれてきたのですか。</p>
------------	---



(分藤特別支援教育課長)

鶴南という言葉も委員ご指摘のとおりの手順で決められたということです。大村にございます虹の原特別支援学校につきましても、同じように公募をして虹の原に決定したということでございます。

(廣田委員)

なんかさっきの文理探究も、こうやって募集したらかえっていい名前が集まったかもしれないなど、ちょっと思ったものですから、大変いい試みだと思っておりますので。

(中崎教育長)

ほかにございませんでしょうか。特別支援学校の大きな動きでございますので。よろしいですか。

----- な し -----

報 告 ( 4 )

それでは、報告事項(4)ですね。お願いします。

(山崎生涯学習課長)

冊子の14ページをご覧ください。離島に住む小学校5、6年生を対象とした令和4年度「しまの『ミライ』応援事業」を8月1日から3日までの2泊3日で実施しましたので、そのご報告をいたします。

この事業は一昨年度、そして昨年度に続き、3回目の実施となります。本年度は40名が参加予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて、9名の辞退がありまして、対馬市から4名、壱岐市から7名、五島市から10名、小値賀町から3名、新上五島町から7名の合計31名が参加しまして、感染対策を徹底しながら実施をいたしました。行程と主な活動の様子については15ページ、16ページに掲載をしております。この中の長崎スタジアムシティプロジェクトや長崎さるく、日本紙器株式会社、長崎市恐竜博物館では、講話や説明の後に子どもたちから次々に質問が出て、興味、関心の高さが伺えました。それから三菱重工業長崎造船所、三菱重工航空エンジンでは、船の製造過程や航空機に使用されるエンジン内の部品についての説明を受け、実際に工場内を見学いたしました。また、県立長崎図書館郷土資料センターでは、資料検索の手順について説明を受け、調べ学習の体験もいたしました。子どもたちは施設のスケールや設備に驚くとともに、このような施設

質 疑	<p>が社会に果たしている役割について理解を深めることができたと思っております。</p> <p>長崎県や地域の活性化、そしてさらにはSDGs等に取り組んでおられる方の講話、企業等の見学や体験活動、そしてまた参加者同士の意見交換などを通して、子どもたちにとっては改めて、しまの魅力や課題について考える機会となりました。参加した子どもたちからは、今後はしまのさまざまな行事を手伝い盛り上げていきたい、あるいは今回学んだことを、同じしまのほかの友達に伝え、協力してさらに住みよいしまにしたい、そしてまた、しまのリーダーとして、しまの発展にかかわりたいなどの意見が出され、本事業が目的としております、ふるさと長崎県を担っていく意欲を高め、離島地域でのリーダー育成につながる取り組みになったと考えております。</p> <p>今後も体験交流活動を通した子どもの豊かな心や社会性の育成、ふるさと長崎県の魅力の再認識を図る取り組みを推進してまいりたいと思っております。</p> <p>(中崎教育長)</p> <p>ただいまの報告に対しまして、ご質問、ご意見等ございませんでしょうか。</p> <p>(廣田委員)</p> <p>大変、いい事業だと思うんですね。恐らく生涯学習課はずっとしまの子どもたちを、こうやってこちらに連れてきて、例えば今度の場合も、長崎の非常に注目を浴びているスタジアムシティプロジェクト建設現場とかね、あるいは三菱重工とか航空エンジンとかね、あるいは恐竜博物館もそうなのだけど、恐らく今度の子どもたちってものすごく感動を受けたのではないかと思いますよ。私はこの数年しか知らないのですが、多分、生涯学習課では、名前は変えているけど似たような事業をもう何年もやってきているのではないですか。というのが、こういう子どもたちが大人になって、やはりこういう事業を通して自分はこういう離島地域でのリーダーになったというような事例みたいなものが、生涯学習課に伝わってないのかなと。何かそういうことをただ3年間で終わらせるのではなくて、事業の効果というか、そういうものを確認する作業はどこかでしていないのかと。難しいことだろうと思いますけどね。この小さな子どもたちが10年後、20年後のことだから難しいと思うけれども、そういう事例がないのかなというのと、そういうことをやってみる</p>
-----	--

気はないのかなという質問です。

(山崎生涯学習課長)

今おっしゃられましたように、しまの子どもたちがこちらに来て体験学習をするという本事業については3年目なのですが、その前の平成16年度から、令和元年度までは逆にしまの方に行って、しま独自の体験活動を行うっていう、しま交流事業というのを長くやっておりました。ただ先ほどおっしゃったような追跡といいますか、参加児童のその後についてというようなところでの検証というのは行ってないのですが、今回のこの令和2年度から行っているこの事業につきましては、参加児童が小学校を卒業して中学生や高校生になってからも、ふるさと学習やその地域探究活動等において、リーダー的な役割を果たしてほしいなというふうに期待しておりますし、本事業がきっかけとなって中学、高校での継続的な取り組みによって成果があらわれてくればなというふうに考えております。

ただ関係市町教育委員会には、市町主催の少年の主張大会であるとか、あるいは参加者の小学校において、事業に参加しての意見発表等を行う機会を設けていただきたいというふうをお願いをしているところですので、参加児童のその後の様子や中高での活躍等については、関係市町教育委員会と連絡を取りながら情報共有等を図っていきたいと思っております。

(廣田委員)

せっかくやる事業なので、やっぱり今、おっしゃったように市町教委にそういう呼びかけをして、1つでも2つでもいいから、何年後かにそういう事例が、そういう主張大会で発表されたとかね、そういうのがあれば、また今度はこういう事業をやってみようというきっかけにもなるから、ぜひそういうことも努力していただきたいというふうに思います。

(中崎教育長)

今回の取り組み、少しやっぱり意識はしております、長崎のまちが100年に一度変わるといふ変革期という大きな動きがありながら、長崎の子どもたちは全国一、外に出ていると。やっぱりこのまちの動きと子どもたちの動きの流れが一致してないので、さっきお話がありましたようなスタジアムシティであるとか、長崎が誇る企業であるとかというのをですね、ふるさと教育もそうですけど、

いろんな事業の中にしっかり盛り込んでいながら、子どもたちの心の中に長崎を誇りに思う、愛着を持つような気持ちというのはしっかりやっていかないといけないと思っています。少し、メニューを変えながら、今回取り組んだのですが、その検証というか、いろんな事業の積み重ねの中でつながっていく話だと思うのですが、一過性に終わらせないような取り組みというのは市町と検証しながら、よりこの事業を発展させるようにやっていただけたらありがたいなと思っています。

(嶋崎委員)

対象が離島に限定されていますよね。まあ、しまの音楽祭もそんなのでしょけれど、これは補助金との関係ですか。

(山崎生涯学習課長)

先ほど申し上げました、最初はしまに行って体験活動を行うという事業だったのでしょけれども、今度は、しまの子どもたちが主人公になるような、そういう形でということで逆の形を始めたというところはありますけれども、先ほどおっしゃいましたように補助金の関係でいきますと、今の事業については地方創生推進交付金というのを半分使っております。

(嶋崎委員)

その離島の対象として補助金が利用されているということですか。

(山崎生涯学習課長)

国庫支出金です。

(嶋崎委員)

思いますのは要するに、しまの人、離島の子どもたちに特定されているので、本来であれば県域全体で、こういう事業に取り組むべきというのが、まず大前提にあらうかと思うのですが、やっぱり財政的な面でしまに特化せざるを得ないというのが現状なのでしょね。

(山崎生涯学習課長)

しまの子どもたちは例えばいろんな活動において、その機会がもしかしたらこちらにいる子どもたちより、いろんなところを訪問し

たりとか、実際、本物にふれたりというような機会が少ないこともあろうかと思ひまして、そういった意味で、しまの子どもたちにそういう機会をさらに提供するという意味もあります。

(中崎教育長)

補助金の採択要件にはなっていないということですかね。

(山崎生涯学習課長)

はい、そうです。

(嶋崎委員)

そうなのですか。

(中崎教育長)

本土であっても、可能だったということですね。しまの子どもたちの機会が少ないので、そこに特化してやったという、ご説明でよろしいですかね。

(山崎生涯学習課長)

その事業に関してはですね。

(嶋崎委員)

そうであれば、県域全体に広められたらいいかがですか。やっぱりこのコロナで修学旅行が延期、中止されて、要するに我々の地域を知ろうというような試みがなされて、評価すごく高いのですよね。これから新幹線も参りますし、地元の子どもがやはり深く知る必要があろうかと思うのですよね。そういうのを子どもたちにも経験をさせるというのは、それこそさっきの文理探究科もやっぱり地域とともにということであれば、例えば今回は県北、県南、島原半島というような、そのような地元を再認識するという機会を、しまに特定しなくてもいいのかなと思ったわけなのですけども。

(山崎生涯学習課長)

さまざまな面からまた考えていきたいと思っはおりますけれども、先ほど言いましたように、しまの子どもたちの機会をという点も考慮に入れながら、また今後、考えていきたいと思ひます。

(中崎教育長)

いや、しまを全然、否定されているわけじゃなくて。今おっしゃった分はですね、今度、ふるさとを知ってもらうという事業を一からちょっと組み立て直そうとしています。この中身はいいねっていう話だったので、しまのところを継続するかどうかは別にしてですね、今のご指摘もあったように、ちょっと事業組み立ての中で県下の子どもたちに今のまちの動きを知ってもらうというような事業はぜひ組み立てたいと思っていますのでですね、ちょっとそこはいろんなほかの事業の組み合わせの中で検討してまいります。

(伊東委員)

先ほどちょっと女性活躍のことを言って、また同じようなことを言って申しわけないのですが、こういうところを、いろいろ見学していて説明してくれる、お話をしてくれる人に、結構若くて元気な女性がいると、子どもたちも、こういう領域でも自分も活躍できるとか、そういうのが広がっていくかなと思っていました。

それが一つと、もう一つは先ほど廣田先生が言われて、今、こういうのに参加した学生、子どもたちが先々どうかっていうことについて、以前、長崎大学で「リケジョ」をやっていたときに、実際、そのセミナーに来た学生さんたちが本当に理系に行ってくれているのかとか、どういう領域に進んだのかっていうのをちょっと調べたいと思ったことがあったのですが、結構、個人情報がすごくブロックしてしまっていて、学校に問い合わせても教えてもらえないんですね。だからこういうときに参加した子どもさんに、先々のフォローアップができる、そういうコネクションを作っておいて、ずっとフォローしていくっていうのはいいのかなとちょっと思ったりしていました。

(中崎教育長)

最初にちょっと女性の活用はいろいろ今、検討中なので、次長の方から少しご紹介してもらえますか。いわゆるそういった長崎ゆかりの女性の方たちに、いろんな話をしてもらう機会ということで。

(狩野教育次長)

長崎県ゆかりの方、出身の方ですね、全国で女性の方が活躍されています。先般、ズナイデン房子さんという、島原高校の私の2級先輩なのですが、その方があるチャンプーのマーケティングで一躍、有名になられた方なのですが、その方の講演を聞きました。その方の経歴に非常に感銘を受けました。ぜひ、こういう生き

方があるのだということ、子どもたちにも、教職員にも聞かせたいなと思っています。また松尾敏男さんという名誉県民の長女さんですね、松尾由佳さんという方も、ぜひ協力をしたいということをおっしゃっておりますので、そういった方々のお力を借りながら、子どもたちに夢を持たせるように、そういった取り組みを進めてまいりたいと考えております。

(中崎教育長)

ぜひ長崎の教育のためにという、結果としてですけど、今、いろいろな女性の方と、そのようなネットワークができておりますので、ですね、ちょっと少しそういった形で女性活躍であるとか、あるいは女性管理職に向けてみたいなどころも含めて、何かできないかと、今検討しているところでございます。

(伊東委員)

そういう第一線で活躍している方のお話を聞くというのもとてもいいと思いますし、例えば三菱重工に行って、こういうところで女性の人が働いているのかと、こう思う気持ちというのですかね、それもすごくいいことなのかなと思っているので、いろんな切り口があるかと思いますが、検討いただければと思います。

(中崎教育長)

2つ目のご質問の分は何かお答えはないですかね。よかったのですかね。

(伊東委員)

まあフォローアップをしていくのだったら、やっぱり個人情報がブロックしてくるので、ちょっと最初に参加した時点から関係を作ってちゃんと情報が入ってくるようにしておかないと、先々、その人がどういう道に進んでいったとか、本当に地元で活躍してくれたとかいう、そういう情報を握るにはそれがいいかと思っています。なかなか学校は教えてはくれないからですね。

(中崎教育長)

わかりました。ほかに、ご質問よろしいですかね。

----- な し -----

<p>報 告 ( 5 )</p>	<p>それでは、報告事項 ( 5 ) お願いいたします。</p> <p>(岩橋体育保健課体育指導監)</p> <p>冊子 1 の 1 7 ページからになります。報告事項 ( 5 ) 「令和 6 年度全国高等学校総合体育大会 ( 北部九州 4 県開催 ) 長崎県準備委員会の設立について」、ご報告をさせていただきます。</p> <p>まず令和 6 年度の全国高等学校総合体育大会、いわゆる通称インターハイにつきましては、令和 6 年 7 月の末から 8 月下旬にかけて、福岡県、佐賀県、大分県、長崎県の北部九州の 4 県で開催されます。本県では 6 市町で 9 競技が開催され、大会の成功に向けて円滑な準備を進めるために、このたび長崎県準備委員会を設立いたしました。</p> <p>1 の長崎県準備委員会の設立、第 1 回総会についてでございます。県準備委員会につきましては、会長に長崎県教育長、会場市町や高体連などから 2 2 名の委員により設立をいたしました。また副会長には県スポーツ協会の荒木理事長、県高体連の小野下会長が就任をされております。第 1 回総会におきましては、北部九州ブロックの開催基本方針や大会愛称、スローガン、シンボルマーク、大会ポスター、図案選考結果等の報告があり、その中でシンボルマーク部門で本県の長崎工業高校の横尾美優莉さんの作品が最優秀賞を受賞しております。また開催の基本的考え方や事業計画等が承認をされ、今後の本県開催基本構想決定に向けて、5 つの専門委員会で協議することを確認いたしました。</p> <p>2 の今後の主な準備計画についてです。第 2 回総会を来年 2 月に予定をし、本県開催基本構想及び競技会場・日程等について決定をすることとしております。また第 2 回総会に向けて、先ほど申しました 5 つの専門委員会を開催し、本県開催基本構想決定に向けて専門的な見地からのご意見をいただきながら、委員会ごとに基本方針をまとめてまいります。今後、来県される選手及び関係者の皆様方の思い出に残る大会が開催され、選手の皆さんの活躍で県民の皆様が活力や希望を与えられるように万全の準備を行ってまいります。</p>
<p>質 疑</p>	<p>(中崎教育長)</p> <p>ただいまの報告に関しましてご意見、ご質問等ございませんでしょうか。</p> <p>(嶋崎委員)</p> <p>参加者数の見込みを見てみますと、選手・監督について、実数 1 万名強となっております。あらゆるイベントごとで言えることでし</p>



ようけども、アクセスであったりとか宿舎であったりとかというようなことを事前にきちんと参加される方にお知らせをしとかないといけないので、その辺は十分、配慮をしていただければなと思います。

(岩橋体育保健課体育指導監)

ありがとうございます。今後、宿泊、衛生、輸送、警備等の専門委員会の方で、その辺の具体的な対策について検討をして、しっかりと準備を進めてまいりたいと思います。

(中崎教育長)

特にいい時期になるのですね、観光客のところも含めてです。宿の確保も含めて、事業者の皆さんともよく連携も取ってやっていただくように、よろしく願いいたします。

(岩橋体育保健課体育指導監)

了解いたしました。

(嶋崎委員)

実際、まだ1万人いらっしゃって宿の確保はできるのですか。

(岩橋体育保健課体育指導監)

宿の確保につきましては、しっかりできる予定と申しますか、準備を進めてまいりたいと思っております。

(中崎教育長)

事業者の方が心配されているぐらいですから、大丈夫かなということみたいなので、何かあるのですかね、ご心配の方が。

(嶋崎委員)

期間が、令和6年8月1日から11日でしょう。長崎は大イベントがあるわけなのですよね、9日に。その後も、お盆も実際13日から15日はないにしろ、お盆期間でもありますしね。だから1日から20日までというのは、それなりに来県なさる方は多いのかなど。帰省客であり、あるいは祈念式典にご参加される、関係されるような方、結構もう6、7、8月の恐らく長崎市内のホテル旅館はいっぱいなのですね。通常であれば満室状態。今回もそうだと思いますけれども。

(中崎教育長)

長崎市の会場、会場がちょっと分散はされているみたいですけど、それぞれ宿泊のキャパであったり、人数だったりですね。

(嶋崎委員)

大村にしても、あんまり多くはないですもんね。

(岩橋体育保健課体育指導監)

ありがとうございます。その辺も含めまして、本当に専門的な立場の方々からご意見を伺いながら、遺漏がないように今後も専門委員会等を中心に検討していきたいと思っております。

(中崎教育長)

すみません、私も観光に携わっていたので心配して言っているんですけど、ここの関係者の中にはそういった方がいないじゃないですか。そこはそういった観光連盟になるのかな。そういった全体がわかるような方と通じながら情報を宿泊所に流すとか、何か調整をすとか割り当てを。まあ長崎国体をやっているから一定ノウハウはあるのですかね。

(嶋崎委員)

長崎国体は長崎でやったのですよ。西九州全体で取り組んだわけでしょう。そうすると、佐賀の宿舎もいっぱいに分ったのだらうなと思って、だからなかなか大変だらうなと。長崎国体のときも、当然、嬉野、武雄方面と、福岡からも多分、宿舎を利用したのではないかなと思いますけどね。その辺、よく確認された方がいいと思います。

(岩橋体育保健課体育指導監)

了解しました。ありがとうございます。

(中崎教育長)

ほかにございませんでしょうか。

----- な し -----

(中崎教育長)

協議（秘密会）	<p>よろしいですか。それでは、報告事項（5）は終了いたします。次の議案審議は非公開で行いますので、報道関係者の方は退席をお願いいたします。しばらく休憩して4時20分から再開いたします。よろしくお願いいたします。</p> <p>（別紙議事録）</p> <p>午後4時44分、本日の会議を終了</p>
---------	---